

フェドーシュク
古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科

Ю. А. Федосюк

Что непонятно у классиков

или

Энциклопедия русского быта XIX века

鈴木 淳 一
伊藤 裕
古川 純
長浜 ゆかり
佐藤 剛 史

19世紀ロシア文学は世界に冠たるものでありながら、時代の経過とともにロシア人でさえその完全な理解は困難なものとなってきた。ここ10～20年間の生活環境の変化ですらあまりに激しく、その変化の詳細を思い起こすこともままならないというのに、100年以上も前の風俗習慣ともなれば、理解どころか想像すらできなくて当たり前だからである。どんな財宝であれ、その価値が分からなくては、それこそ「宝の持ち腐れ」である。というわけで、日本語で読める唯一の簡便な参考書ともいべきヒングリーの『19世紀ロシアの作家と社会』（川端香男里訳、初版／平凡社、1971、改訂版／中公文庫、1984／Russian Writers and Society in the Nineteenth Century by R. Hingley）が絶版となった現在——ロトマンの『ロシア貴族』（望月哲男、桑野隆、渡辺雅司訳、筑摩書房）は立派な本だが、残念ながら便覧形式にはなっていない

いし、何よりも高価過ぎる —、つい最近ロシア本国においてロシア古典文学鑑賞のための手頃な参考書が刊行されたのを機に、2001年度「ロシア文学特論」に集った教師と大学院生はそれを訳出し、自らの勉学の一助とも、また日本のロシア文学読者の一助ともしようと思いついた次第である。

翻訳のテキストとして用いたのは、第1版が1998年に「フリント」社と「ナウカ」社から出版された本の第2版 — Ю. А. Федосюк. Что непонятно у классиков, или Энциклопедия русского быта XIX века. 2-е изд. Москва, 1999. — であり、今回訳出するのは全13章中の第9章「貴族と農民」である。ただし、テキストの全体像把握に資するために、原書の本文前に付された「本書について」と「序にかえて」も訳出してあることを断っておこう。

ちなみに全13章の内容は以下の通りである —

- 第1章 民衆のカレンダー (Народный календарь)
- 第2章 血縁親族、婚姻親族、呼称 (Родство, свойство, обращение)
- 第3章 度量衡 (Меры и веса)
- 第4章 金銭と有価証券 (Деньги и ценные бумаги)
- 第5章 土地と権力 (Земли и власти)
- 第6章 官位と称号 (Чины и звания)
- 第7章 軍隊と近衛軍 (Армия и гвардия)
- 第8章 勲章とメダル (Ордена и медали)
- 第9章 貴族と農民 (Дворяне и крестьяне)
- 第10章 貴族および農民階級以外の人々 (Других сословий люди)
- 第11章 服装 (Как одевались)
- 第12章 交通手段 (На чём передвигались)
- 第13章 日常生活と余暇 (Быт и досуг)

なお翻訳は最初1節～2節を伊藤、3節～6節を古川、7節～9節を長浜、10節～11節を佐藤が授業外課題として分担訳出し、それから鈴木が全体の統一的言葉遣いなどに気をつけながら添削し、出来上がった訳文全体をふたたび全員で検討して必要な箇所へは注を施すという形で進められ(訳注はできる限

フェドーシュク 古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科 (鈴木淳一・伊藤 裕・古川 純・長浜ゆかり・佐藤剛史)

り [] という形で本文中に組み込むようにしたが、やむなく脚注としたものもある)、こうしてようやく最後に「本書について」と「序に代えて」を鈴木が冒頭に訳出付加することで今回の完成稿とした。訳語だけでは分かりづらい箇所や文学作品からの引用部などには多々ロシア語が挿入される結果となり、翻訳としての出来上がりは生地の荒いものとなってしまった点をご容赦願いたい。

本書について

本書の歴史はそれほど平凡なものではない。本書の歴史は1959年、「文学の諸問題 Вопросы литературы」誌編集部が39歳の文学者にしてジャーナリストのユーリー・フェドーシュクから一通の手紙を受け取ったことに端を発している。この手紙には次のように書かれていた——「ロシア古典文学作品中に頻出し、革命前ロシアの社会関係や特異な世態風俗を表わす何百という表現は、多くの現代の読者にとって次第に〈躓きの石 камень преткновения〉となっており、それらのあるものはまったく理解されなかったり、またあるものは誤解されたりしている……メートル法しか知らない私には、200デシャチーナдесятинаの土地を所有する地主が裕福なのか貧乏なのかが分からないし、ウォッカを〈半シトーフ полштоф〉飲んだ商人が泥酔しているのかどうかも、チップとして〈青札 синенькая〉あるいは〈赤札 красенькая〉あるいは〈2コペイカ銀貨 семитка〉を与える官吏が気前がいいのかどうかも分からない。登場人物たちの誰が誰よりも地位が上であり、いったいどんな場合にある者は〈貴殿 ваше благородие〉、ある者は〈閣下 ваше сиятельство〉、またある者は〈閣下 ваше превосходительство〉¹という肩書きで呼ばれているのであろうか？ あれこれの長編の個々の事件は〈至聖生神女就寝祭の日 Успенев день〉とか〈フォーマの週 Фомина неделя〉とかに起きるが、もしもそこに自然描写が与えられていないならば、私にはそれがいったい一年のいつ頃のことなのかも分からなければ、事件の発生順序も分からないのである」。フェドーシュクは手紙を終えるにあたり、文学者や歴史家たちにロシア生活の歴史に関する専門の参考書作りを始めるよう呼びかけている。そうした参考書がで

¹ благородие（誉ある方）と превосходительство（高貴な方）は官位に応じた敬称であり、前者は9等官以下に、後者は3～4（5）等官に対して用いられたのに対し сиятельство（栄光ある方）は公爵と伯爵に対して用いられた。ただし、превосходительствоと сиятельствоについてはうまい訳語が見つからないので双方とも「閣下」と訳しておく。

できれば、広範な読者が、そして何よりも文学の教師や学生、生徒たちが「古典作家の作品をより深く理解し、そこに含まれている多くの概念が現代ではお蔵入りとなってしまったために曖昧化した文章の数々に生気を吹き込むことができるようになるだろう」からと。

この手紙は専門家たちに好意的に迎え入れられた。「文学の諸問題」誌はこの手紙を1959年第6号に『必要なのはこんな参考書 Такое пособие необходимо』と題して掲載したが、そこに含まれた学者たちへの呼び掛けは聞き入れられることなく終わってしまった。それから数年の歳月が流れたが、フェドーシュクの意見に従えば、ロシア古典文学の読者にとって絶対に欠かすことのできない参考書は、依然として出版されなかった。その後、「文学の諸問題」誌に手紙が掲載されてから四半世紀あまり経った頃、ロシア人の苗字の起源に関する著作——『あなたの苗字はどんな意味? Что означает ваша фамилия?』(モスクワ、1969年)、『ロシア人の苗字。簡便語源辞典 Русские фамилии: Популярный этимологический словарь』(モスクワ、1972年)——や、モスクワの歴史に関する著作——『環状散歩道 Бульварное кольцо』(モスクワ、1972年)、『クレムリンから放射状に延びる道 Лучи от Кремля』(モスクワ、1978年)、『サドーヴァヤ環状通りのモスクワ Москва в кольце Садовых』(モスクワ。初版1982年、再版1991年)——によって文学者や歴史家の間に広くその名を知られるようになっていたフェドーシュクは、年来の構想を自ら実現しようと思いついたのであった。

新しい著作の執筆は1989年に終了したのだが、残念ながらこの著作の運命は突如暗転してしまった。原稿はさる権威ある国立出版社に引き渡されたのだが、その出版社が、初めは経済的な理由で、次には原稿を担当した出版責任者の杜撰さと知識不足のために、この著作を発行できなくなってしまったのである。またその一方で、出版社との契約があったことはもちろん、この著作は必ずや出版されるだろうと何度も保証されたために、最初は著者自身に(著者は本が出版される前に逝去した)、それから彼の相続者たちに、この著作を他で出版しようとする可能性がずっと返却されないままになってしまったのであ

る。

原稿が完成して数年を経る中で、ロシアでは祖国の歴史と文化に対する関心が急上昇するとともに、読者のこうした関心を満足させる可能性を作者にも、出版社にも決して許すことのなかったイデオロギー的なバリアーは消失し、次のような本が出版された——ロトマン Ю. М. Лотман『ロシア文化談義 Беседы о русской культуре』（サンクト・ペテルブルク、1994年：邦訳『ロシア貴族』筑摩書房）、キルサーノワ Р. М. Кирсанова『18世紀から20世紀前半にかけてのロシア芸術文化における衣装 Костюм в русской художественной культуре 18 — первой половине 20 вв.』（モスクワ、1995年）、ソモフ В. П. Сомов『稀にしか使われない言葉と忘れられた言葉の辞典 Словарь редких и забытых слов』（モスクワ、1996年）、ロゴジニコワ Р. П. Рогожникова 編便覧『19世紀作家の作品における珍しい言葉 Редкие слова в произведениях авторов 19-го века』（モスクワ、1997年）等々。しかし、今読者が手にしている本書は、形式においても内容においても、上述した作品のいずれにも似てはいない。本書を手にした読者の面前に繰り広げられるのは、ロシア古典作家のとくに有名な作品からの自由自在な引用に彩られた、祖先たちの往時の暮らし振りについての興味津々たる物語であり、そして同時にそうした作品についての必要不可欠な歴史的注釈である。この歴史的注釈があれば、読者はそうした作品を以前よりも遥かに深く理解できるようになることだろう。

この小論を締めくくるにあたって、マリーナ・イワーノヴナ・ラブジーナとタチヤーナ・ミハーイロヴナ・トゥムゥローワの両女史に感謝を捧げたい。両女史は、不幸にも失敗に終わった初版の製作時に、本書の編集に力を注いでくれたのであった。また私は、私から原稿を受け取るや、長い間読者との出会いを求め続けてきた父の著書を早速にも出版することに同意してくれた「フリンタ」社に対し、厚くお礼を申し上げないではいられない。

M. Ю.フェドーシュク

序に代えて

ロシア古典文学の豊穡にして多様な世界に彷徨いこんだとき、若い読者はしばしば知らず知らずのうちに様々な困難に遭遇してしまう。古典文学の一頁一頁はまるでタイムマシンのように、社会構造も違えば生活も違い、そもそも人間自体が異なった遠い過去の世界へと我々を連れ去る。それゆえ我々は古典作家の作品を、作者の同時代人ほど、すなわち作品がそのために書かれた読者ほど単純かつ容易に理解することなどできはしない。描かれた時代の特質、法律、民間伝承はもちろん、廃れてしまったか、あるいはその意味を変えてしまった個々の単語や概念を理解するのは並大抵のことではないのである。

ロシア文学とロシア史は血を分けた姉妹である。我々の意識において両者は手に手を携えて歩いている。読者はゴーゴリの『死せる魂』にしる、レフ・トルストイの『アンナ・カレニナ』にしる、作品の舞台となった時代に暗く、農奴制や農奴解放直後の時代のことを何も知らないでは、決して最終的な理解に達することはできないであろう。だからロシア史の知識なくしてはロシア文学を理解することは難しく、またロシア文学の知識はイメージや対話、鮮やかな描写によって歴史に生氣を与え、歴史理解を容易なものにしてくれるのである。

ロシア古典作家の作品は、言葉が我々の意識の中で視覚的イメージあるいは抽象的概念へと変容しない限り、理解不能である。たとえばエヴゲニー・オネーギンが瀕死の伯父のもとに急ごうと、「駅逡馬車に乗って埃の中をひた走る *летя в пыли на почтовых*」[1章1節]。だが「……駅逡馬車で一目散に駆け出した…… *...Стремглав по почте поскакал...*」[1章52節] という1行は何を意味しているのだろうか(現代において「郵便局を疾駆すること *скакать по почте*」などできようか)? 支配人が主人公に「伯父が死の床に伏せている *дядя при смерти в постеле*」[1章52節] ことを知らせてきたとはいったいどういうことなのか? 伯父の屋敷 *усадьба дяди*、またその客間のダマ

スク織の壁紙 штофные обои [2章2節] とはいったい何なのか? そしてまた——これがとりわけ重要なのだが——「……彼は古来の賦役というくびきを/ もっと楽な年貢に変更してやった…… …Ярем он барщины старинной / Оброком лёгким заменил…」 [2章4節] という言葉は何を意味しているだろうか? 早い話が、連という連すべてに大なり小なりの謎がある一方、それらの謎は叙述の意味や時代背景、登場人物たちの心理を明らかにするために本質的なものなのである。

我々が芸術作品を鑑賞し、そこで展開される事件を目の当たりにするとともに理解することを可能にしてくれる例の唯一無二の情景描写もまた、こうした諸々の細部から組み立てられているのである。

そうなのだ、人間はいつの時代でも人間だったのであり、仲良くしたりいがみ合ったり、仕事をしたり遊んだり、また自分の人生の理想を守ろうとして譲歩したり争ったりしていたのだ。我々との間にこうした共通点がないとすれば、どうして遠い過去の作品を読んだり、読み返したりする必要があるのか。だがそれでも歴史的條件は、彼ら祖先を取り巻いていた生活環境全体は、我々現代人のそれとは多くの点で異なっていたのである。

さて読者にはもはや、本書の書かれた理由が明白であろう。本書の目的は、うっすらと覆い被さって理解を阻んでいる時代の靄を取り払うことによって、ロシア古典文学の理解を容易なものにしたいということである。では本書は誰のために書かれたのか? これから実社会へ旅立とうとしている若人のためである。そうした若人にとって自国の文学ならびに自国の歴史への興味を募らせるのは、とりわけ現代においては、ごく自然で当たり前のことなのだから。

本書はテーマ毎に章分けされていて、それぞれの章があれこれの過去の事実を断片的にではなく、歴史的全体像の中に相互に関連づけられた形で提供するように仕組まれている。そうした方法を取ることによって本書はたんに文学の学習参考書としてのみならず、18世紀末～20世紀初頭のロシアの社会的な諸関係や生活に関する簡便この上ない便覧としても役立てることができよう。ちなみに本書の資料はすべてロシア古典文学に依拠している。

本書は必ずしも1章から最終章まで順番に読んでゆく必要はない。興味を引かれる章や節に目を通していただだけで十分である。巻末に本書で解説された語句のアルファベット順インデックスを収録してある。何らかの作品で理解不能な言葉に出会った場合、読者はその言葉が解説されている頁を——しかもたんに解説されているばかりか文学作品のテキストを例にとって解説されている頁を——簡単に見つけることができるであろう。

本書はこうした便覧参考書というものの初めての試みの一つである。したがって何らかの不足や曖昧さが無いとも限らない。だがそれでも、読者は過去数世紀の興味深い生活世界への参入をきっと楽しんでくれるに違いないと信じていたいものである。

1 節

貴族階級

Дворянское сословие

貴族はロシア古典文学作品の大部分の主要登場人物である。フォンヴィージン Фонвизин (1744-1792) からブーニン Бунин (1870-1953) にいたるまでのロシア古典作家の大部分もまた貴族であった。では貴族とはそもそも何者であろうか？

貴族と呼ばれたのは、帝政ロシアのもっとも特権的な階級である。貴族は通常土地はもちろ、1861年までは所有地に暮らす農民をも所有していた。ピョートル I 世の治世以来〈世襲貴族 потомственный дворянин〉の称号は、武官または文官の一定の官位に登ることによって、あるいは何らかの勲章を授与されることによって、さらには特別な個人的功績を達成することによって獲得できるようになった。

そもそもの初め〈貴族 дворянин〉と呼ばれたのは、大公の宮廷あるいは皇帝の宮廷に仕える人々であった。〈貴族〉の語源もここに、すなわち宮廷 двор に由来している。14世紀来ロシアの貴族はまずは大公 великий князь から、後には皇帝から、軍務に対する報酬としての土地を、つまり〈封地 поместье〉を与えられるようになる。1714年ピョートル I 世は、貴族のこうした土地を世襲領地として定めたのであるが、そのとき先祖代々の世襲領地を所有していた封建領主たる大貴族 феодал-боярин もまた貴族階級に組み入れられたのであった。〈世襲領地 вотчина〉、すなわち先祖代々一つの家族に属していた土地と、封地、すなわち軍務に対して皇帝から下賜された土地とは、それ以来〈領地 имение〉という概念に一体化されたのである。いずれの場合も所有地は通常〈封地 поместье〉と呼ばれ、その所有者は〈地主 помещик〉と呼ばれた。

封地あるいは領地を〈地主屋敷 усадьба〉と同一視してはならない。地主屋敷とは所有地全体のことではなく、いくつかの隣接する建物や敷地に庭を含め

た地主の邸宅のことをさすに過ぎないからである。

ピョートル I 世時代以来、法的には平等の権利を持っていた貴族であるが、その出身により〈世襲 (名門) 貴族 родовое (столбовое) дворянство〉と官職の勤続昇進に付随して下賜される〈勤務 (新) 貴族 служилое (новое) дворянство〉とに分けられることになった。〈名門貴族 столбовой дворянин〉を自称したのは、世襲領地を所有し、16-17世紀に〈系譜巻物 столбцы〉に、つまり貼り合わされて巻物状になった名簿に記帳された由緒正しく高貴な家系の子孫たちであった。名門貴族は零落した者でさえ、彼らを押しのけようとする後発の勤務貴族に対して自らの精神的な優越性を感じていた。600年の家系を誇りにしていたプーシキンは詩作品『我が家系 Моя родословная』の中でとげとげしくもこう書いている――

我国では名門の出自は新しく
出自が新しいほどに立派な名門なのだ。
У нас нова рождением знатность,
И чем новее, тем знатней.

また彼の『書簡体小説 Роман в письмах』の登場人物の一人は友人に書いている――「官僚貴族が世襲貴族に取って代わることなどできはしない Аристократия чиновная не заменит аристократии родовой」と¹。

ピョートル I 世は、貴族の男性は自らの特権に対する代価として必ずや公務を勤め上げなければならないばかりか、最下級のランクから勤め始めなければならないと命じた。貴族の青年は近衛連隊に兵卒として編入された。ピョートル I 世の後継者の時代になると状況は一変した。貴族の親たちは子供を兵役か

¹ 『書簡体小説』は1829年頃に書かれた未完の小説で、作者の死後に始めて公表された。題名は作品集の編者によってつけられたもの。訳者の手元にあるプーシキン全集 (A. C. Пушкин. Полное сочинение сочинений в 10 томах. Т. 6. Издательство “Наука”. Ленинград, 1978, стр. 50) によれば、引用部は8章「ヴラデーミル某の友人に宛てた書簡」からのものであるが、日本語に翻訳されたもの (『プーシキン全集』第4巻、河出書房新社、1972) にはその個所が抜けている。

ら解放するために、子供を誕生と同時に近衛連隊の下士官として登録しておきながら、子供をそこへ送り出さずに、成人するまで手元においておいたのがあった。プーシキンの『大尉の娘 Капитанская дочка』の主人公ピョートル・グリニョフ Петр Гринев は、まだ生まれる前に軍曹として近衛連隊に登録されている。「私は学業が終了するまで休暇中だとみなされていた Я считался в отпуску до окончания наук」とグリニョフは語っている [1章「近衛軍曹」]。ここで言及されている学業とは、この小説に描かれてもいれば、またフォンヴィージンの喜劇『親がかり Недоросль』でもお馴染みの家庭教育のことである¹。グリニョフが16歳になったとき、厳格な父親は彼を、彼が登録されていたペテルブルグの近衛連隊ではなく（彼にはそこに入隊すべき十分な権利があったはずであるが）、辺鄙な田舎の軍隊に送り出そうとする——「しばし痛い目に会うがいい Пускай его потужит」という訳である [1章「近衛軍曹」エピグラフ]。「近衛軍曹 гвардии сержант」グリニョフはベロゴルスク要塞 Белогорская крепость に到着すると、ほどなくして将校に任ぜられている [4章「決闘」]。

成人前の子供のために貴族は住み込みの家庭教師 домашний учитель だけでなく、通いの家庭教師 приходящий учитель も雇った。通いの家庭教師への報酬は授業一回一回に対してではなく、何回かの授業に対してまとめて支払われた。行われた授業に対する証明書は〈切符 билет〉と呼ばれ、後日その切符の枚数に応じて報酬が支払われたのである。通いの家庭教師に対するこうした清算方法については『知恵の悲しみの Горе от ума』の中で言及されている——「……根無しのごロツキを家に住み込ませるばかりか、切符払いでも雇っている…… …Берем же побродяг, и в дом и по билетами…» [1幕]。

15～16歳までの貴族の子息は、つまり公務を遂行すべき年齢にまだ達して

¹ フォンヴィージンの作品原題〈Недоросль〉は、16歳未満の未だ官職につけない未成年を意味する言葉であるが、ここでは慣例にしたがって『親がかり』と訳しておく。フォンヴィージンの作品が発表されて以来、この語は無為徒食に暮らす貴族の子息を揶揄するのに用いられたから『ぐうたら坊ちゃん』と訳してもいいだろう。

いない貴族の子息は〈未成年 недоросль〉と呼ばれた。この語は подросток あるいは несовершеннолетний という語と同一概念を持った公用語として使われた。それゆえ、貴族子弟学校 Лицей に入学するために提出された書類の中で12歳のプーシキンが未成年 недоросль と呼ばれているとしても、それは何ら驚くにはあたらないのである。この недоросль という語はフォンヴィーゼンの喜劇が人気を増すにつれて否定的ニュアンスを持つようになり、次第にいささか愚かで甘やかされたお坊ちゃんを意味する符牒となっていった。

1762年、皇帝ピョートル三世は〈貴族自由令 Манифест о вольности дворянства〉を發布した。それは貴族を義務的な公務から解放する布告であった。その結果貴族の大部分は官職を辞して、自らの領地へ居を移し、農奴の稼ぎの上に胡坐をかいて無為で自堕落な生活を送るようになったのであった。

プーシキンがこうした法律に憤慨し、次のように書いたのも当然のことであった——「[不首尾におわった専制に対する貴族階級の闘争を記念するものとして残ったのは、ピョートル三世の貴族の自由に関する2つの政令だけだった。すなわち]我々の先祖はかくも誇りとしたが、恥じて然るべきであったかの政令である [Памятниками неудачного брения аристократии с деспотизмом остались только два указа Петра III-го о вольности дворян,] указы, коими предки наши столько гордились и коих справедливо должны были стыдиться」¹。

喜劇『親がかり』に登場する無知な女地主プロスタコワ Простакова は、その残虐非道な行いを告発されたとき、「……それじゃいったいなんだって私たちに貴族自由令が下されたっていうんだい? ...да на что ж дан нам указ о вольности дворянства」と抗議する[5幕4場]。彼女の考えでは、この政令は地主に農奴の処遇に関する完全な自由を与えるものに他ならなかったのでは

¹ 1822年8月2日という日付が記載された草稿『18世紀ロシア史断想 Заметки по русской истории XVIII века』からの引用。1825年以降にプーシキンが焼却した自伝メモの歴史的な導入部だったと思われる。

る。それに対してスタロドゥム Стародум は嘲笑的にこう応じている — 「政令解釈の名人だね! Мастерница толковать указы!» [5幕4場]。プロスタコワが領地経営権を剥奪された後、プラヴヂェン Правдин は彼女の息子ミトロファヌシカ Митрофанушка にこう語っている — 「おい、お前をどうすべきか、それは分かっている。お前は勤めに出なくちゃいけないのさ С тобой, дружок, знаю, что делать. Пошел-ко служить» [5幕6場]。

18世紀の後半は、農奴化された農民を犠牲にしてロシア貴族階級が最大の発展を遂げた時代である。18世紀末の農奴制の惨状についてはラヂーシチェフ Радищев が『ペテルブルグからモスクワへの旅 Путешествие из Петербурга в Москву』に衝撃的な迫力で描き出している。農奴制時代の地主貴族の絶対的権力、自領地におけるそのしたい放題の横暴ぶりは、ネクラソフ Некрасов の物語詩『誰にルーシは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』に登場するオボルト=オボルドゥエフ Оболт-Оболдуев が次のように回想している —

誰一人反抗するものはなく、
 誰でも好きな奴を赦してやり、
 誰でも好きな奴を処刑する。
 法 — それは我が欲望!
 鉄拳 — それは我が警察!

[1部5章「地主」]

Ни в ком противоречия,
 Кого хочу — помилую,
 Кого хочу — казню.
 Закон — мое желание!
 Кулак — моя полиция!

いうことをきかない農民については、地主はそうした農民をシベリア流刑に処す権利も持っていたが、定期的な新兵徴募時に兵士に出してしまう場合が最も多かった。

しかし貴族とは多義的な概念である。もっとも特権的な階級でありながら、貴族はもっとも教養ある階級でもあったのである。貴族階級からは司令官や社会活動家、作家や学者、画家や音楽家など、ロシアの進歩的な人々が数多く輩出している。そしてまた打倒専制、打倒農奴制を叫ぶ闘士の多くも貴族だったのである。

2 節

爵位のついた貴族

Титулованные дворяне

父祖伝来の名誉ある称号、あるいは君主 государь によって授けられた称号は〈爵位 титул〉と呼ばれた。ルーシ Русь においてもっとも古い爵位は〈公爵 князь〉であった。公爵と呼ばれたのは多くの古来の封建領主 феодал、すなわち大規模な土地所有者であり、この爵位は世襲された。18世紀の始め以来、公爵という爵位は個人的功績に対して皇帝 император によって授けられるものとなった。もっとも高い、しかし非常にまれな爵位であったのが〈至高公爵 светлейший князь〉であった。最初の至高公爵となったのは、ピョートル I 世の戦友メンシコフ А. Д. Меншиков であった。ロシア文学の登場人物として描かれた至高公爵は、実際に存在した歴史的人物ばかりである。そうした人物としてゴーゴリ Гоголь の『クリスマス前夜 Ночь перед Рождеством』のポチョムキン Потемкин とレフ・トルストイ Лев Толстой の『戦争と平和 Война и мир』のクトゥゾフ Кутузов がいる。「殿下 ваша светлость」というのが至高公爵に対する呼掛けの言葉として定められていた。

公爵の妻は〈公爵夫人 княгиня〉、娘は〈公爵令嬢 княжна〉と呼ばれ、公爵の息子は父親と同じように〈公爵 князь〉と呼ばれた。もっとも、古くは公爵の若い息子は〈公子 княжич〉と呼ばれていた。19世紀を迎える頃までに公爵家の多くは零落する運命にあった。ドストエフスキー Достоевский の『白痴 Идиот』の主人公ムイシキン公爵 князь Мышкин を思い出せばよかろう。

彼はペテルブルグでしがない筆耕職を探し求めざるをえないのである。

3番目の貴族の爵位は〈伯爵 граф〉であった。西洋からの借用であるこの爵位は、1706年ピョートルI世によってロシアに導入された。ロシア最初の伯爵になったのは司令官シェレメテフ Б. П. Шереметевであった。伯爵の妻と娘は〈伯爵夫人・令嬢 графиня〉と呼ばれ、息子は父親同様に〈伯爵 граф〉と呼ばれた。トルストイは『戦争と平和』のヒロインである若きナターシャ・ロストワ Наташа Ростоваを「伯女 графинечка」と呼んでいるが、これは公式な言葉ではまったくない。

公爵と伯爵への呼掛けには〈閣下 сиятельство〉という尊称が用いられた。

ロシアにおける貴族の最下位爵位は〈男爵 барон〉（女性用には〈男爵夫人 баронесса〉）であった。この爵位もまたピョートルI世によって導入されたのだが、初めのうちはバルト海沿岸地方の枢要な貴族のためのものだった。それゆえ、「男爵」あるいは「男爵夫人」という爵位の後にはドイツの姓を耳にするのが常であった。文学の登場人物の中にシトラリー男爵夫人 баронесса Штраль（レールモントフ Лермонтов 『仮装舞踏会 Маскарад』）、フォン・クロッツ男爵 барон Фон Клоц（グリボエドフ 『知恵の悲しみ』のレペチーロフ Репетилов の義父）、ムーフェリ男爵 барон Муффель（トゥルゲーネフ Тургенев 『ルーヂン Рудин』）、トゥゼンバフ男爵 барон Тузенбах（チャーホフ Чехов 『三姉妹 Три сестры』）が登場するのも偶然ではないのである¹。

男爵に対する呼掛けには決まった尊称がなく、たんに「男爵様 господин барон」と呼掛けるのが常だった。

18世紀末までには、とりわけパーヴェルI世時代のロシアでは、ロシア人の男爵が出現するようになった。ストロガノフ家 Строгановы、スカリャチン家 Скарятинны、チェルカソフ家 Черкасовыなどがそうである。

¹ барон は Baron、баронесса は Baronesse。またドイツ人名 Штраль、Фон Клоц、Муффель、Тузенбах はそれぞれ、Strahl（シュトラール）、von Klotz（フォン・クロッツ）、Muffel（ムッフエル）、Tuhsenbach（トゥーゼンバハ）であろう。

レフ・トルストイの長編小説『復活 Воскресение』には次のような会話が出てくる――

「『あなたはヴォロビョーフがどうして男爵なのか知っていますか?』。ネフリュードフがこうしたロシア人の姓と結びついたこの外国の爵位を発音したときの幾分滑稽なイントネーションに対して答えながら、弁護士は言った。『これはパーヴェル皇帝が何かの褒美として、どうやら宮廷の侍従でもしていたらしい彼の祖父にこの爵位を授けた結果なのです。何かで皇帝をととても喜ばせたのです。彼を男爵にすべし、我が言を違えてはならぬ、というわけですね。こうしてヴォロビョーフ男爵が始まったのです。あの男はこのことをひどく鼻にかけているんです。大した古狸ですよ。』」 [2編18章]。

«— Вы знаете, отчего барон — Воробьев? — сказал адвокат, отвечая на несколько комическую интонацию, с которой Нехлюдов произнес этот иностранный титул в соединении с такой русской фамилией. — Это Павел за что-то награбил его дедушку, — кажется, камер-лакея, — этим титулом. Чем-то очень угодил ему. Сделать его бароном, моему нраву не препятствуй. Так и пошел: барон Воробьев. И очень гордится этим. А большой пройдоха».

貴族の爵位は夫から妻に引き継がれた。しかし、公爵令嬢 княжна あるいは伯爵令嬢 графиня に生まれた女性は、もし公爵でない者や伯爵でない者に嫁いだなら、自らの生まれながらの爵位を失うこととなった。あるいは夫の爵位を得ることとなった。チャーホフの短編『公爵夫人 Княгиня』でヒロインは大修道院長にこう語っている――「実は私、嫁ぎまして……伯爵夫人から公爵夫人になりました Вы знаете, я замуж вышла... из графини стала княгиней」。反対の場合もありえた。しかし、もし夫に爵位がなかったなら、妻もまた爵位なしとなった。オブロンスカヤ公爵令嬢 княжна Облонская として生まれたアンナ・カレーニナ Анна Каренина は爵位のないカレーニン Каренин に嫁いだために、公爵令嬢という爵位を失ってしまう。各種の書類で新しい姓にオブロンスカヤ公爵令嬢と書き加えたり、名刺にオブロンスカヤ公爵令嬢と書くこ

とも彼女には許されていたが、それ以上のことではなかった。アンナ・カレーニナが「閣下 *ее сиятельство*」という尊称をつけて呼ばれることはもはやなくなってしまうのである¹。

3 節

土地ではなく農奴

Не земля, а души

1861年の農奴制廃止まで地主の豊かさを規定していたのは、所有している土地の大きさではなく、所有している農奴の数であった。土地の大小も、それを耕す働き手が無ければそれほど重要ではなく、また価値もそれほど高いものではなかった。

地主は〈小地主 *мелкопоместный помещик*〉(所有農奴数100人以下)、〈中地主 *среднепоместный помещик*〉(所有農奴数数百人)、〈大地主 *крупный помещик*〉(所有農奴数1000人前後かそれ以上)に分けられる。このように豊かさの尺度は領地の大きさではなく、農奴の数であった。トゥルゲーネフの短編のひとつにはっきりとこう書かれている——「当時財産価値というものは、周知のように、農奴数によって規定されていた。В то время цены имениям, как известно, определялись по душам」〔?〕

ここで注意すべきは、こうした算定が男性だけを考慮したいわゆる〈納税義務者 *ревизская душа*〉によっておこなわれたということである。そこに女性や子供を含めると実際の「農奴」の数ははるかに多かった。

ファミーソフ *Фамусов* がソフィヤ *Софья* の婚約者の価値をどのように決めたかを思い起こしてみよう。

¹ 〈*сиятельство*〉は通常〈*ваше, его, её, их*〉と一緒に使われた。相手に向かって直接呼び掛けるときは〈*ваше*〉、間接的に話題にするときは男性なら〈*его*〉、女性なら〈*её*〉、またとくに強く敬意をはらうときには〈*их*〉を伴うのがつねだった。

どんなカスでもかまわない、
世襲農奴が二千ほどもあるのなら —
それこそ立派な婿だ
[グリボエードフ『知恵の悲しみ』2幕]
Будь плохинький, да если наберется
Душ тысячки две родовых —
Тот и жених....

ここでいう「カス плохинький」とはみすぼらしくみっともない者のことで、「世襲の родовые」とは世襲農奴のことである。第3幕ではチャツキーЧацкийが所有する農奴は300人か400人かについて、ファムーソフはフレストーフХлестоваと激しく口論している。

地主の持つ農奴の数はそれこそまちまちであり、文学作品中にもそれがうかがえる。ゴーゴリのイワン・フョードロヴィチ・シポーニカ Иван Федорович Шпонька の所有農奴は18～24人だが [ゴーゴリ『ヂカーニカ近郷夜話』第2部『イワン・フョードロヴィチ・シポーニカとその伯母』]、彼の領地は繁栄していた。零落したアンドレイ・ドゥブロフスキー Андрей Дубровский には70人 [プーシキン『ドゥブロフスキー』1章]、ゴーゴリのコロボチカ Коробочка には80人の農奴がいるのに対し [ゴーゴリ『死せる魂』1部3章]、吝嗇なプリュシキン Плюшкин にはなんと1000人の農奴がいるのである [同前6章]。レールモントフの『仮面舞踏会 Маскарад』のアルベニン Арбенин には3000人、『アンナ・カレーニナ Анна Каренина』のコンスタンチン・レーヴィン Константин Левин にも同じくらいの農奴がいる。アリーナ・ペトローヴナ Арина Петровна (サルティコフ=シチェドリン『ゴロヴリョーフ家の人々 Господа Головлёвы』) には4000人の農奴がいる。エゼルスキーЕзерский (プーシキン『我が主人公の系譜 Родословная моего героя』) は「12,000人の農奴を従えていた имел 12 тысяч душ」。エゼルスキー自身はといえば、「俸給で生活しており／記録係として仕えていた жалованьем жил / И регистратором служил」のだが、たったの2世代間における貴族の没落はかくも激しかったのである。

領地を持たぬ貴族はごくわずかの農奴しか持たなかった。400人の死んだ農奴を買い付けることを決めたチチコフ Чичиков は、生きている農奴を2人しか持っていなかった。下男のパトルーシカ Петрушка と御者のセリファン Селифан である [ゴゴリ『死せる魂』1部1章]。『大尉の娘 Капитанская дочка』のミローノフ Миронов 大尉は「農奴といえばパラーシカというメイドしかいなかった всего-то душ одна девка Палашка」 [3章「要塞」]。オヂンツォーフ Одинцова のおば (トゥルゲーネフ『父と子 Отцы и дети』) にはたった一人、「水色のモールつきの着古した緑色の制服を着、三角帽をかぶった в изношенной гороховой ливрее с голубым позументом и в треуголке」陰気な下男がいるだけである [15章]。

4 節

地主所有農民

Помещичьи крестьяне

地主に隷属する農民はその義務労働の形態によって〈賦役農民 барщинный (крестьянин)〉、〈年貢農民 оброчный (крестьянин)〉、〈屋敷番農民 дворовый (крестьянин)〉に分けられる¹。

〈賦役 барщина〉を果たすために、農民は自分の道具を使って地主の土地を耕していた。もちろん報酬はなかった。法律では一応週3日と決まっていたものの、週6日まで賦役を延ばす地主もあった。

年貢を課された農民は様々な手仕事や商売、手工業や馬車運送などに従事したり、工場に雇われたりした。そして賃金の一部を〈年貢 оброк〉として地主に支払っていた。

肥沃な土地の地主にとっては賦役がより有益で、やせた土地、つまり黒土地帯ではない地域 (県) では年貢の方が好まれた。トゥルゲーネフの短編『ホー

¹ 「地主所有農民」がいわゆる「農奴」である。

りとカリーヌィチ Хорь и Калиныч』[『獵人日記』] ではこう語られている — 「オリョール県の百姓は背が低く、猫背気味で、愛想がなく、うさんくさそうな上目遣いの目つきをしていて、ヤマナラシで作ったほったて小屋に住み、賦役に出るだけで商いはせず、食うや食わずの生活で、足にはわらじを履いている。いっぽうカルーガ県の年貢百姓は松でできた広い農家に住み、背は高く、勇敢で、ほがらかな目つきをしている…… Орловский мужик невелик ростом, сутуловат, угрюм, глядит исподлобья, живет в дрянных осиновых избенках, ходит на барщину, торговлей не занимается, ест плохо, носит лапти; Калужский оброчный мужик обитает в просторных сосновых избах, высок ростом, глядит смело и весело...」。この違いはオリョール県が黒土地帯であり、カルーガ県は黒土地帯でないことに起因する。

一般に農民にとっては時間的に融通のきく年貢制のほうが、非常な体力を消耗させる賦役労働に就くより楽なものであった。

エヴゲニー・オネーギンは叔父の領地を譲り受けた際、

彼は古来の賦役というくびきを

もっと楽な年貢に変更してやった。

かくして農奴はその運命を祝福したのだった。

[2章4節]

Ярем он барщины старинной

Оброком легким заменил;

И раб судьбу благославил.

年貢農民が領地外に出るときには特別な書類が必要とされた。それは地主によって発行される〈パスポート паспорт〉である。

賦役における仕事の量や年貢として納める金額は〈チャーグロ тягло〉によって決定された。〈тягло〉とは役畜を持つ農民世帯(家族)のことを指すとともに、またこの世帯単位での労働ノルマをも意味した。

トゥルゲーネフの『ムム—Муму』のゲラシム Герасим は、まだ村にいた時分から「ほとんど村一番の働き者の課税百姓 считался едва ли не самым

исправным тягловым мужиком」と考えられていた。

〈課税農民 **тягловый крестьянин**〉以外に〈免税農民 **бестягольный крестьянин**〉というのも存在した。彼らはかなりの高齢者や病人であり、必要に応じて様々な肉体労働に駆り出された。トゥルゲーネフの喜劇『居候 **Нахлебник**』には、エレツキー家 **Елецкие** の領地で道を掃除するために集められた免税農民のことが描かれている。

〈屋敷番農民 **дворовый (крестьянин)**〉とは土地から引き離され、地主の住居や敷地に仕えた農民のことを指す。彼らは普段、主人の住居の近くにある〈召使小屋 **людская изба или дворовая изба**〉に住んでいた。また主人の屋敷の住居内にある屋敷番農民の部屋も〈召使部屋 **людская**〉と呼ばれた。

屋敷番農民は召使部屋の共同テーブルで食事を供給されるか、〈月給 **месячина**〉という月々の現物支給品を受け取っていた。この月々の現物支給品は目方で支給されたため、ときに〈計量配給 **отвесное**〉とも呼ばれた。また同時に「靴代 **на башмаки**」の名目で僅かばかりの現金も支給された。

主人のもとにはよく客が訪れたが、その際召使たちは見えるところに控えていなければならなかったので、屋敷番農民は賦役農民よりも比較的きれいな身なりをしていた。彼らは正装させられ、しばしば主人の衣装のお古を襤褸ぼろになるまで着ていた。屋敷番農民の男性は髭を剃らなければならなかった。

地主旦那衆は屋敷番農民である召使一般を〈**человек** (原義「人間」)〉とか〈**люди** (原義「人々」)〉などと呼んでいたが、その結果もともと素晴らしいものであるはずのこれらの言葉は、侮辱的なニュアンスを持つようになった。ゴンチャロフ **Гончаров** の『平凡物語 **Обыкновенная история**』では若いアドゥエフ **Адуев** がペテルブルグで見かけた腐った梨について、「我々のところではこんなものは召使でも食べないでしょうよ **У нас это и люди не станут есть**」[?章]と言っているが、このフレーズはまさにそうした侮辱的ニュアンスについて雄弁に物語っている。

屋敷番もまた農奴に違いなかったが、そうは呼ばれなかった。19世紀文学においてつねに出会うのは「農民と屋敷番 **крестьяне и дворовые**」あるいは

「屋敷番と百姓 дворовые и мужики」である。プーシキンの『ドゥブロフスキー-Дубровский』ではトロエクーロフ Троекуров についてこう書かれている——「彼の農民と屋敷番への態度は厳格で勝手気ままなものだった С крестьянами и дворовыми обходился он строго и своенравно」 [11章]。

セルゲイ・アクサーコフ Сергей Аксаков は、地方の地主は「その大部分がその習俗や教養の点で自分の召使に非常に似通っている по большей части весьма близки к своей прислуге и нравами и образованием」と書いている。ゲルツェン Герцен は「貴族と屋敷番の差異は、その呼び名の差異と同様、ごく些細なものである Разница между дворянами и дворовыми так же мала, как между их названиями」と皮肉混じりに指摘している。ゲルツェンはまた同時に、屋敷番が自らの不自由を強烈に痛感していたことも強調している¹。屋敷番は四六時中主人の目の届くところにその身を晒し、顎でこき使われていたからである。

5 節

屋敷番農民の種類

Штат дворовых

屋敷番農民のトップに立っていたのは〈執事 дворецкий〉だった。普通は堂々とした初老の男性で、住居内の秩序や食事の配膳を見守る役割を担っていた。時としてフランス語で〈マジョルドーム мажордом〉 [majordome「邸宅の長」の意] と呼ばれた。トゥルゲーネフの『ムム—Муму』には地主夫人の主任執事 главный дворецкий ガヴリール Гаврил が登場する。

〈御者 кучер〉、〈給仕 буфетчик〉、〈部屋女中 горничная〉、〈乳母 кормилица〉など今日でも容易に理解できる屋敷番の呼び名はさておき、ここではとうの昔に使われなくなってしまった呼び名について説明しよう。

¹ アクサーコフとゲルツェンの引用原典は不明。

〈小姓 камердинер〉も屋敷番の一員で、部屋つきの召使をいうが、俗語で комардин, камельдинер などとも呼ばれた。若い主人の側近小姓は立派な身なりをし、その行動の奔放さにおいて、そしてときには無遠慮な振る舞いや主人のまねをしようとする欲求において際立っていた。プーシキンの『贗百姓娘 Барышня-крестьянка』 [『ペールキン物語』] においてアレクセイ・ベレストフ Алексей Берестов がリーザ Лиза と面会するとき、成功はしなかったものの、自らを自分の小姓に見せかけようとしたのも偶然ではない。

馬事に携わる召使は〈馬丁 стремянный/стремянной〉と呼ばれた。彼らは主人が馬に乗って出かける際に（そこには獵も含まれる）お供をするのが役目だった。『贗百姓娘』の老ベレストフは馬丁を連れてウサギ狩りに出かけている。トルストイの『戦争と平和 Война и мир』では「老いた伯爵の馬を……伯爵の馬丁が引いていった Лошадь старого графа... вел графский стремянной」と書かれている。『大尉の娘』のサヴェリイチ Савельич は馬丁から〈傳育役 дядька〉に抜擢されている。オブローモフ Обломов の召使ザハール Захар は、はじめは彼の傳育役であった。

屋敷内でコサック風の身なりをしている子供の召使は〈カザーチク каза-чик〉と呼ばれた。彼らは普段客の到来を主人に告げたり、いろいろな用事をいいつけられて走り回ったり、御馳走を運んだりもした。トゥルゲーネフの物語詩『地主 Помещик』には次のような一節がある――

干しブドウ、お菓子、ビスケットを
カザーチクたちが皿にのせて運んでいる……
Изюм, конфекты, крендельки
На блюдах носят казачки...

馬車につけられた馬の先頭の一頭に乘る未成年の御者、あるいはごくまれに体格の貧弱な大人の御者は〈先頭馬騎手 фореитор (俗語で фалетор)〉と呼ばれた。

貧乏地主、または吝嗇な地主のもとではしばしばいくつかの役目が一人に統合された。トゥルゲーネフの『獵人日記 Записки охотника』 [『タチャーナ・ポリー

ソヴナとその甥』] に出てくるタチヤーナ・ポリソヴナ Татьяна Борисовнаのもとでは、「小姓と執事と給仕の役目を担っていたのは、70歳の召使ポリカルプであった Должность камердинера, дворецкого и буфетчика занимает семидесятилетний слуга Поликарп」。

豊かな地主貴族の場合は、都市においても召使を抱えていたが、彼らは刺繍とモールつきの制服を着ていたので〈制服召使 ливрейный лакей〉と呼ばれた。主人が出かける際には、背の高い〈外出召使 выездный лакей〉が、すなわち馬車の後部に立つ〈従者 гайдук〉が相伴した。

プーシキンの『ピョートル大帝の黒奴 Арап Петра Первого』や『スペードの女王 Пиковая дама』で幾度となく出くわすのは〈パールスカヤ・パールィニャ барская барыня〉という奇妙な用語である。それは〈鍵番女 ключница〉のこと、つまり豊かな地主貴族の邸宅で家計をきりもりする女性のことである。

地主一家のために食事を作る女コックは〈白い料理女 белая кухарка〉と呼ばれ、召使の食事を用意する女コックは〈黒い料理女 черная кухарка〉と呼ばれた。

地主夫婦には〈戸口娘 сенная девушка (語源は「干草 сено」ではなく、「入口の間 сени)」〉が仕えたが、それは一般的には入口の間で用事がいいつけられるのを待っている小間使いのことである。普段彼女たちはただたんに〈小娘 девка〉と呼ばれた。

屋敷勤めの召使に〈コンパニオン嬢 компаньонка〉を含めるのはふさわしくない。彼女らは農奴ではなく、地主の邸宅に仲間として、つまり地主夫人がトランプ遊び等の娯楽に興じる際につきあう相手として、あるいは若い令嬢が散歩する際に付き添う相手として雇われていたからである。

コンパニオン嬢よりも卑しい地位ではあったが、ほぼ同様の役割を果たしていたのは〈女性居候 приживалка〉である。大体が零落した貴族であった。地主貴族のもとで養われている男性は陰口で〈食客 нахлебник〉と呼ばれていた。トゥルゲーネフはこの種の悲劇的な人物像を喜劇『食客 Нахлебник』の

中に描いている。

裕福な地主たちは「気晴らしのために для забавы」当時巷間で珍重されていた〈黒人 арап〉を手に入れようとした。ファムーソフのもとへ「黒人女中 арапка-девка」を連れて現れたフレストーフは、ザゴレツキーЗагорецкийが「定期市で黒人の子供を二人手に入れたのよ двоих арапченков на ярмарке достал」と話している [『知恵の悲しみ』3幕2場]。

6 節

領地の経営

Управление имением

農奴制下では領地経営のために地主は〈管理人 приказчик〉または〈村長 бурмистр〉を任命するか、あるいは農村共同体 община によって選出されるか地主によって指名される〈長老 староста〉に運営を委任したりした。農民を様々な仕事に割り当てる長老の助手は〈代表 выборный〉と呼ばれたが、それらは彼らが選抜されたからである。これらの人々は全員が自由のない農奴であった。

土地経営管理のために自由民の中から〈支配人 управитель или управляющий〉が雇われることもよくあった。支配人は多少とも読み書きそろばんができたし、経験もあった。この役目にはロシア語もロシア民衆のこともよく知らないが、それでも農業のことならなんとかわかるドイツ人がよく選ばれた。ドイツ人支配人の人物像はロシア文学に数え切れぬほど登場するが、もっともインパクトが強いのはネクラーフの物語詩『誰にルーシは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』に出てくるフォーゲリ Фогельである。一人の地主が所有するあれこれの領地はそれぞれ別な支配人によって管理されており、その支配人たちを束ねていたのが〈総支配人 главный управляющий〉である。あるいは一人の支配人に統括された複数の管理人がそれぞれの領地を経営することもあった。しかし「支配人」という用語は変化していった。「支配

人」と「管理人」の間の意味的差異はなくなり、トルストイとトゥルゲーネフの作品においては同じ人物について両方の語が用いられている。

広大な領地は地主に雇われた退役軍人 *отставной военный* によって経営された。外国暮らしの長いヴェレイスキー公爵 князь Верейский (『ドゥブロフスキー』) の場合、そのすべての領地を経営していたのは退役した少佐である。ユルロフ公爵 князь Юрлов (ネクラソフの物語詩『誰にルーシは住みよいか』) の場合、その〈世襲領地 *вотчина*〉では、

……総支配人は
星形の勲章をつけた
憲兵隊大佐だった……
[1部4章「幸福な人々」]
... главный управляющий
Был корпуса жандармского
Полковник со звездой...

トゥルゲーネフの短編『村長 Бурмистр』[『獵人日記』] に登場する村長ソフロン Софрон は狡猾なゴマすり屋で、百姓たちを破滅させ、地主の土地を自分のものにしてしまう農民である。周囲の百姓たちは彼のことを、「あいつは犬で人間じゃあない Собака, а не человек」と噂する。

農奴制の崩壊とともに〈村長 бурмистр〉という語は急速に廃れたが、雇用労働者である〈支配人 управляющий〉と〈管理人 приказчик〉は相変わらず存続し続けた。チェーホフの戯曲『イワノフ Иванов』に登場する無作法で機転のきくソールキン Соркин のことを思い起こしてみればよい。

ほとんどあらゆる作品中で支配人という存在は、農民の無慈悲な迫害者、地主のものを掠め取る泥棒として、はっきり否定的に描かれている。主人がつねに都会か外国、あるいは他の領地に住んでいる場合、支配人は自らを農民と土地に対する無制限な支配者だと感じていたのである。

地主は悪党だが、支配者はといえどもきまって
搾取者、絶望的なまでの掠奪者である —

Помещик — лиходей, а если управитель,

То верно — живодер, отчаянный грабитель, —

とネクラースフは書いている[『ガランスキー伯爵の旅行記抜萃 Отрывки из путевых записок графа Гаранского』(1853)]。

オストロフスキー Островский の戯曲『そりがあわなかった! Не сошлись характерами!』の女地主プレジネワ Прежнева は言っている——「そして突然私はこう言われるの、私が全財産を使い果たしたとか、もう何も残っていないだとか。ひどい話よ! きっと、何もかにもがあの支配人と村長たちのせいなんだわ И вдруг мне говорят, что я все прожила, что у нас ничего нет. Это ужасно! Вероятно, всему виною там эти управляющие да бурмистры。」と。

読み書きができない長老 старостаのもとではとくに、助手の一人として書記 писарь の役目を果たす〈村書記 земский〉がいた。プーシキンの『ゴリューヒノ村史 История села Горюхина』には次のような一節がある——「……長老は主人から手紙が来たことを告げ、村書記にその手紙を皆に読み聞かせるようにと命じた ...староста объявил, что от барина получена грамота, и приказал земскому прочесть ее во услышание мира」。この〈村書記 земский писарь〉を本書の第5章「土地と権力」で説明した〈郡警察署長 земский исправник〉や〈地区長 земский начальник〉と混同してはならない。

大規模な領地の運営ともなると、特別な機関としての〈事務所 контора〉が存在した。れっきとした事務員を擁しながらも筋の通らない指示命令を出すこうした官僚主義的機関を、トゥルゲーネフは短編『事務所 Контора』[『獵人日記』]で笑いのめしている。

7 節

狩猟

Охота

地主たちが好んだ娯楽は狩猟であった。裕福な地主は膨大な数の召使を抱えた一連の立派な狩場を持っていた。〈**猟犬番 псарь**〉は猟犬の世話をしたが、〈**ボルゾイ犬 борзая собака**〉を仕込み、狩猟時に猟犬を指揮する〈**主任猟犬番 старший псарь**〉は〈**猟犬番長 доезжачий**〉と呼ばれた。犬追い猟を全般にわたって指揮するのは〈**狩猟係 ловчий**〉である。〈**猟犬番長助手 выжлятник**〉(「狩猟用の牡犬 выжлец」および「狩猟用の牝犬 выжлица」から派生した語)は〈**足の速い狩猟犬 гончая собака**〉を飼育し、〈**ボルゾイ犬係 борзовщик или борзятник**〉はボルゾイ犬を飼育した。

狩猟番の一種制服とも言うべきは、モールの記章のついた赤いカフタンだった。

狩猟はどのように行われたのか？ まず〈**雇われた勢子 егерь-загонщик**〉が猟犬に獲物を追跡させる。獲物を発見した猟犬はさかんに吠えて獲物を森から追いたてようとするが、そこで勢子はとりわけ俊足を誇るボルゾイ犬を獲物に向けて解き放つ。狩人とは言えば、ボルゾイ犬が獲物を追い詰めるまで、ボルゾイ犬の後を追って馬を飛ばすのである。

猟犬を〈**一級の獲物 красный зверь**〉(つまり大きな獲物)にけしかけるとときには特別な掛け声が使われるが、それは〈**ポルスカーニエ порсканье**〉(「オ・ホ・ホー о-го-го」)あるいは〈**ウリュリユカーニエ улюлюканье**〉(「ウ・リュ・リユー у-лю-лю」)と呼ばれる――

いったん休むと、また狩は続けられる。

馬が疾駆し、犬がけしかけられ、数限りない獲物が捕われる。

(ネクラーフ『犬追い猟 Псовая охота』)

Так отдохнув, продолжают охоту,

Скачут, проскают и травят без счёту.

ウサギを捕まえるときは「捕まえろ ату」あるいは「そいつを捕まえろ ату его」という掛け声がかげられた（こうした掛け声を犬にかけることをロシア語の動詞では〈アトゥーカチ атукать〉という）。

ウサギ猟は普通〈遠隔領地 отъезжее поле〉で行われた。この〈отъезжее поле〉という表現がどんな意味なのか、今日では分からなくなっている。「私の隣人は急いでいる／狩場のある遠隔の領地へと сосед мой поспешает / В отъезжие поля с охотою своей」——これはプーシキンの有名な詩の一節である [『秋 (断章) Осень (Отрывок)』第1連]。〈отъезжее поле〉と呼ばれたのは、屋敷から遠く離れていて、猟をするためにわざわざ出かけてゆかなければならないような領地である。

地主が犬追い猟に出かける様子は、プーシキンの物語詩『ヌーリン伯爵 Граф Нулин』の冒頭に色彩豊かに描かれている——

今だ、今だ！ 角笛が吹き鳴らされる。
 狩装束を纏った猟犬番は
 朝もまだきにはや馬に跨っている。
 ボルゾイ犬は繋がれたまま飛び跳ねている。
 Пора, пора! Рога трубят;
 Псарь в охотничьих уборах
 Чем свет уж на конях сидят,
 Борзые прыгают на сворах.

今日では〈スヴォーラ свора〉と言えば「犬の群れ」のことを指すが、狩猟用語としての〈свора〉は一對のあるいは数匹のボルゾイ犬を繋いだ「手綱 поводок」のことである。「熱烈な猟人 горячий охотник」であるアンドレイ・ガヴリーロヴィチ・ドゥブロフスキーの資産状況は、彼が所有しているのが「2匹の猟犬と一本の手綱に繋がれた数匹のボルゾイ犬だけだった только двух гончих и одну свору борзых」 [『ドゥブロフスキー』1章] という事実によって明らかにされている。ここで言われている〈свора〉とは現代の読者が考えるように犬の一群のことではなく、一對あるいはせいぜい二対の犬のことなの

である。こうしてトロエクーロフ Троекуров が「500 匹以上」の猟犬を所有しているのに対し、ドゥブロフスキーはどんなに多く見積もっても6匹の猟犬を所有しているのに過ぎないということが分かる。

〈свора〉と似たような意味を持っているのは〈**СМЫЧОК**〉という言葉である。これは狩りへ出かける際に一对の猟犬を繋ぎとめるために使った手綱 верёвка のことである。「小生はですね……12本の手綱分の猟犬を持っておりました У меня, сударь... было двенадцать смычков гончих」——トゥルゲーネフの『猟人日記』に出てくる零落した地主のカラターエフはこう回想している。つまり彼は24匹の猟犬を所有していたことになる [『ピョートル・ペトローヴィチ・カラターエフ』]。

地主旦那衆が狩猟に打ち込む様子は、ネクラソフの物語詩『誰にルーシは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』の地主オボルト＝オボルドゥエフが色彩豊かに描写している [1部5章「地主」]。同様の場面にはネクラソフの詩作品『犬追い猟 Псовая охота』やトゥルゲーネフの短編『チェルトプハーノフとネドピュースキン Чертопханов и Недолюскин』 [『猟人日記』] においても出会うことができる。犬追い猟のロシア文学においてもっとも完全かつ鮮明な描写を提供してくれるのは、レフ・トルストイの『戦争と平和』(2部4編3～4章)である。そこではロストフ家の領地オトラドノエ村で行われた狩猟の様子が、詳しくそして面白く語られている。

8 節

郷土と自由農民

Однодворцы и вольные хлебопашцы

農奴制下にあって〈郷土 однодворец〉と呼ばれたのは、階級の低い退役軍人たちであった。彼らには兵役に対する報酬として封地ではなく、農奴のつかない、通常農家一所帯分ほどの小さな土地が下賜された。彼らは個人的に自由な身分にあり、農民を取得する権利さえ持っていたが、農奴と同様に〈人頭税

подушная подать〉と呼ばれる税金を収めていた。彼らはほとんどの場合自分の土地は自分で耕作した。トゥルゲーネフは短編『郷土オブシャニコフ Однодворец Овсяников』[『獵人日記』]の中で次のように書いている——「一般的に言って、我が国では現在に至るまで郷土を百姓と区別するのは難しい。郷土の経済状況は百姓とほとんど変わることなくひどいもので、子牛はソバばかりあてがわれ、馬は息も絶え絶え、輓具と言えは縄製なのである Говоря вообще, у нас до сих пор однодворца трудно отличить от мужика, хозяйство у него едва ли не хуже мужицкого, телята не выходят из гречихи, лошади чуть живы, упряжь верёвочная」。作中オブシャニコフは「金持ちだという噂はなかったものの、郷土というものの通則からははみ出た人間 был исключением из общего правила, хоть и не слыл за богача」として描かれている。

トゥルゲーネフの短編『チェルトプハーノフとネドピュースキン Чертопанов и Недопюскин』の主人公ネドピュースキンの父親は、「郷土の出身で、40年間も勤務してやっと貴族の称号を手に入れたのであった вышел из однодворцев и только сороколетней службой добился дворянства」。

〈自由農民 вольный или свободный хлебопашец〉と呼ばれる零細土地所有者もまた、郷土同様に農奴制のくびきから自由であった。1803年の政令によって農奴は自由の身分を買い取ることも、小さな土地を取得することもできるようになったのである¹。またごくまれにはあるが、特別恩赦という形で地主自身が農奴を解放し、土地を分け与えてやることもないわけではなかった。

プーシキンの『ゴリューヒノ村史 История села Горюхина』ではシフカ河が、封地としてのゴリューヒノ村と「残虐非道な風習で知られる不穏な隣人 соседей беспокойных, известных буйною жестокостью нравов」であるカラ

¹ 1803年2月に「自由農民に関する政令 Указ о вольных хлебопашах」が公布され、地主が自発的に農奴と協定を結んで、有償土地付きで村ごとあるいは家族ごとに農奴を解放できることになった。

チェヴィの自由農民所有地とを分け隔てる境界線となっている¹。レフ・トルストイの『戦争と平和』のアンドレイ・ボルコンスキー家にあっては、「農奴300人規模の領地の一つが自由農民に委ねられることになった（これはロシアでもっとも早い例のうちの一つである）ондо имение его в триста душ крестьян было перечеслено в вольные хлебопашцы（это был один из первых примеров в России）」のである [2巻3部1章]。

農奴制下にあっては自由農民も徴兵義務から逃れられなかった。ネクラソフの詩作品『忘れられた村 Забытая деревня』では自由農民が農奴の娘ナターシャに恋するが、二人の結婚は総支配人 главный управительによって妨害され、旦那の到着にすべてが託される。そうこうしているうちに事態は、「自由農民は兵隊になってしまった。／そしてナターシャ自身はもはや結婚を夢見ることもない…… хлебопашец вольный угодил в солдаты. / И сама Наташа свадьбой уж не бредит…」という結果になってしまうのである。さらにもう一つの農奴制時代の悲劇がある……

地主によって解放された農奴は〈解放農奴 вольноотпущенник〉と呼ばれた。トゥルゲーネフの短編『リゴフ Льгов』 [『獵人日記』] には、かつて地主の小姓 камердинер だったが、地主によって解放された獵人ヴラデーミルが登場する。彼の暮らしぶりときたら、「現金はびた一文持たず、定職もなく、ほとんど食うや食わず без гроша наличного, без постоянного занятия, питался только что не манной небесной」なのである。

トゥルゲーネフのもう一つの短編『マリーナの泉 Малиновая вода』 [『獵人日記』] の主人公トゥマン Туман は、「さる伯爵の解放農奴 вольноотпущенный человек графа」である。

農奴制の廃止とともに〈郷土〉や〈自由農民〉といった概念は、〈解放農奴〉という概念同様、永久に過去のものとなってしまった。

¹ 『ゴリュエーヒノ村史』は1830年秋にボルジノ村で起稿されたが、未完のまま放棄された作品。

9 節

後見と抵当

Опека и залог

さまざまな機会をとらえて政府は貴族の領地を〈後見 опека〉に付すことができた。

後見に付されたのは〈相続人のいない領地 *имение выморочное*〉、つまり所有者の死後、相続人がいないために主人不在のまま取り残された領地、あるいは零落し、ついには破産してしまった所有者の領地である。フォンヴィージンの『親がかり Недоросль』ではプロスタコワの領地が「農民に対する非人道的処遇のゆえに *за бесчеловечное отношение к крестьянам*」後見に付されてしまうが [5幕4場]、これは極めてまれなケースであって、典型的な事例ではない。

『知恵の悲しみ *Горе от ума*』の中でレペチーロフはチャツキーに、「政令によって後見に付されてしまった *в опеку взят указом*」と打ち明けているが [4幕]、これは破産したレペチーロフの領地が政府の監督下におかれてしまったということである。

後見という処置が発動されたのは、領地の所有者が未成年だったり、責任能力のない人物だったりした場合などである。後見人 *опекун* として指名されたのは現地の貴族であるが、その場合指名された貴族は領地収入の5%を報酬として受け取る決まりだった。

ゴーゴリの作品 [『昔気質の地主たち』] では昔気質の地主が死んでしまったあと、彼らの相続人は領地を荒廃させ、ついには領地が後見に付されてしまっている——「賢明な後見人は（さる元代義士と色あせた軍服を着たどこその二等大尉がその任に当たっていた）あっという間に鶏と卵の一切合切を根絶やしにしてしまったのだった *Мудрая опека* (из одного бывшего заседателя и какого-то штабс-капитана в полинялом мундире) перевела в непродолжительное время всех кур и все яйца」。

農奴制下において後見に課せられた課題は、貴族による土地所有の全面的な支援ということであった。破産した領地はしばしば国庫 казна に移管されたり、競売 аукцион にかけられたりしたが、その領地に居住する農奴の所有物となることは決してなかったのである。

19世紀初め、地主たちの間に広く普及したのは、領地を農奴もろともに〈**抵当 залог**〉に入れることだった。この〈**抵当**〉の実態を究明することは大いに有益である。

領地の所有者は自分の領地を、あるいは領地の一部を抵当にして、様々な種類の信用機関 кредитное учреждение から貸付金 ссуда を借り入れることができた。貸付金の借り入れは魅力的なものだった。なにしろ地主は、初めのうちは何一つも失うことなくまとまった金を受け取り、それを自分の個人的用途のためにはもちろん、商業取引のためにさえ使用することができたからである。しかしながら貸付金に対しては貸付期限が満了するまでの毎年、少なからぬ利子 процент を信用機関に支払わなければならなかった。

もしも利子が支払われなかったり、期限満了までに貸付金が返済されなかった場合には、領地は貸し手である信用機関に没収され、競売（つまり競争入札）によって売却されたのだった。買い手によって納入された金額は信用機関の予算を補填する一方、領地を失った地主を待っていたのは破産者としての境涯であった。周知のように、これこそチェーホフの戯曲『桜の園 Вишневый сад』に登場するラネフスカヤ Раневская が襲われた運命に他ならない。

不動産 недвижимое имущество を抵当にした利子つき貸付金を貸し出す権利はまた、〈**後見人協議会 опекунский совет**〉にも与えられていた。そうした〈**後見人協議会**〉は二つあって、それぞれペテルブルクとモスクワの養育院 воспитательный дом に付設されていた。これらの養育院は「皇室付属の императорский」と呼ばれていたにもかかわらず、つまり国家の保護下にあっただにもかかわらず、国庫からの金銭的援助は一切なされていなかった。何百人もの孤児を抱えるこれらの養育院は、個人的な慈善を始め、宝くじ、劇場興行、トランプ販売などの利益によって運営されていた。しかしながらこれらの

養育院の主たる収入源は、なんといっても貸付業務であった。

プーシキンの『贗百姓娘 Барышня-крестьянка』[『ペールキン物語』]に出てくる破産した地主ムウロムスキー Муромский は、「馬鹿な人間だとは思われていなかった。というのも彼こそ県内の地主の中でいの一に領地を後見人協議会の抵当に入れることを思いついた人間だったからである。彼は馬鹿どころか、その反対に、当時としては極めて複雑にして大胆な人間だと思われていたのである почитался человеком не глупым, ибо первый из помещиков своей губернии догадался заложить имение в Опекунский совет: оборот, казавшийся в то время чрезвычайно сложным и смелым」。

このような種類の抵当は次第に地主間の日常茶飯事となっていった。ピエール・ベズーホフ（レフ・トルストイ『戦争と平和』）は後見人協議会に、全領地の抵当利子として約8万ルーブル支払っている[2巻2部10章]。地主の領地を質屋や後見人協議会に抵当として入れるという話は、多くのロシア古典作品の中で読むことができる。それはたとえばプーシキンの『エブゲニー・オネーギン Евгений Онегин』、ゴーゴリの『幌馬車 Коляска』、レフ・トルストイ『少年時代 Юность』、オストロフスキーの一連の喜劇などである。

キルサーノフ家の場合、事態は深刻である（トゥルゲーネフ『父と子 Отцы и дети』）。そこでは「後見人協議会が脅しをかけ、速やかにして滞納金なしの利子払いを要求してくる опекунский совет грозитя и требует немедленной и безнедоимочной уплаты процента」からである[22章]。

しばしば「領地は抵当に入れられ、さらにまた抵当に入れられた имение было заложено и перезаложено」というフレーズに出くわすことがある。「抵当に入れられた заложено」というのは理解できるにしても、「さらにまた抵当に入れられた перезаложено」というのはいったいどういうことなのだろうか？

領地をくさらに抵当に入れる перезаложить」というのは、領地を買い戻さなければならない、つまり抵当によって借り入れた金額を利子の全額とともに払い込まなければならない（これはかなりの金額であった）最初の抵当期限満

了時までには、もう一度新たに領地を抵当に入れ直すということである。二回目の抵当に対しては、信用機関は毎年支払うべき利子をかなりの程度——普通は二倍に——釣り上げた。つまり信用機関は借り手に極めて不利な条件を強要したのである。しかし地主には他にいかなる手立ても残されていなかった。地主には領地、あるいはその他の抵当物件を買戻す資金などはなかったからである。その結果必然の成り行きとして、二重抵当の負担は凄まじい勢いで農奴の肩にのしかかり、農奴は法外に搾取されることになったのである。

自分の所有する農民を抵当に入れる権利、つまり農奴を抵当にして貸付金を借り入れる権利——死亡した農奴を買い集めるチチコフのインチキ商売はすべてこの権利を土台として組み立てられている [『死せる魂』]。

もし貴重品 (動産 *движимое имущество*) が質屋に抵当に入れられるのは現品買戻しまでのことであつたとすれば、土地や農民が抵当に入れられるのは、当たり前のことながら、抵当物件が実在することを証明する地方当局お墨付きの公式書類に準拠してのことであつた。

国は時折〈人口調査 *ревизия*〉を実施した。この農奴人口調査の最大の目的は、新兵に適した男性の数を確定することである。それゆえ〈納税義務者 *ревизская душа*〉と呼ばれたのは農奴全員ではなく、男性の農奴だけであつた。

1719年から1850年にいたるまで10回の人口調査が行われた。農奴に関する資料は〈納税義務者台帳 *ревизская сказка*〉と呼ばれる特別な書類に書き込まれた。新しい人口調査が実施されるまでは納税義務者は法的に実在するものとされた。農奴人口調査を日々実施することなどありえないことだつた。こうして死亡あるいは逃亡した農民もまた公式には実在しているものとみなされたのであり、地主はそうした農民に対する税金も、すなわち〈人頭税 *подушный подать*〉も納めなければならなかつたのである。

チチコフもまたこうした状況を利用したのであつた。彼は地主から死んだ農奴を生きた農奴として買い集めるが、それは買い集めた農奴を抵当に後見人協議会からまとまった金を借り入れようと目論んでのことなのである。これは地主にとっても有利な取引であつた。地主とすれば、チチコフから小額とはいえ

存在しない農民に対する代金を手にする一方で、存在しない農民に対する人頭税を国庫に支払う義務から免れることもできたからである。当然チチコフは死んだ農奴を少しでも安く買おうとし、地主は少しでも高く売ろうとするが、そこに農奴売買の激しいかけひきが生まれることになる。

生きた農奴を合法的に購入し、抵当に入れる場合には、借り手は生きた農民の実勢価格から算出された金額を受け取るるとともに、買い戻し期限までの毎年、抵当とした農奴全員に対する規定の利子を支払わなければならなかった。

だがチチコフがやろうとしたのはそういうことではなかった。彼は死んだ農奴を生きた農奴として抵当に入れることによって貸付金を受け取り、それから納税義務者の価格〔つまり彼が後見者協議会から借入れる金〕と彼がその納税義務者買入れのために地主に支払った代金〔実際は死んだ農奴の代金〕の差額から生み出される資金を手に雲隠れしたかったのである。いかなる利子のことも、ましてや買い戻しのことなども、彼の念頭にはまるでなかったのである。

障害はただ一つであった。チチコフは土地を所有していないのに対し、貴族が土地つかずの農民を買うことができたのはただ〈移住目的 на вывод〉の場合だけ、つまり農民を新しい土地へ住み替えさせる場合だけだったのである。この禁則を回避するためにチチコフが考え出したのは、あたかもヘルソン県 Херсонская やターブリヤ県 Таврическая (クリミア地方) といったどこか人跡未踏のステップ地帯の県に土地を買い求めようとしているかのように見せかけることだった。この思いつきには説得力があった。政府はロシア南方に広がる無人地帯への入植に関心を持っており、希望さえすればどんな貴族にもその地方の土地をほとんどただ同然で売却するという周知の事実があったからである。であればこそ、どうやらチチコフは農民の男だけを家族から引き離して新しい土地へ移住させようとしているらしいということに、誰一人当惑しないのである〔1部7～8章〕。こうした取引が成立しえたのは1833年までのことに過ぎない。この年、農民を「家族から引き離して с разлучением от семьи」売買することを禁じた法律が制定されたのである。

チチコフのインチキ商売がモラルに反するのは、彼が架空の農民を抵当とし

て他のどこでもない、寡婦や孤児の後見を司る後見人協議会に入れようとしたからである。寡婦や孤児の養育費として使われていたのは、抵当貸付業務から得られる収益金に他ならなかった。だとすればチチコフは、不幸のどん底に追い込まれ、しかも半飢餓状態で襤褸を纏った人々の悲しみと涙を餌食にすることで一攫千金を狙っていたことになるのである。

10 節

貴族の自治

Дворянское самоуправление

郡と県の貴族たちは〈自治権 самоуправление〉を持つ〈貴族団 дворянские общества〉を組織した。3年に一度、郡と全県の貴族たちは郡と県の選挙に寄り集まり、そこでは貴族団長 предводитель дворянства、判事 судья、郡警察署長 исправник、その他諸々の役人が選ばれた。『検察官 Ревизор』では判事リャプキン・チャプキン Ляпкин-Тяпкин がフレスターコフ Хлестаков に次のように自己紹介している。「1816年から3年任期で、貴族団の意向によって選ばれまして…… С восемьсот шестнадцатого был избран на трехлетие по воле дворянства...」 [4幕3場]。

〈貴族団長 предводитель дворянства〉に選出されたのは、もともと権威があつて裕福な地主である。この地位はかなり煩わしいものだったが、しかし権威のあるものだった。貴族団長は裁判所に問題を持ち込まずに、地元貴族たちの衝突を調停し、不安な人々を宥めすかす義務があつた。県の貴族団長は県知事のもっとも近い助言者であり支えであつたが、トゥルゲーネフの『父と子』に見られるように、ときには両者の間に口論が持ち上がることもあつた。

貴族団長の地位は、あちこちへ出かけたり、客をもてなしたりするのに、ある程度の出費が要求された。[『戦争と平和』の] イリヤー・ロストフ伯爵 граф Илья Ростов は、この地位が「あまりにも大きな出費 слишком большие расходы」を伴うので、郡の貴族団長を辞めている。トゥルゲーネフの短編『二

人の地主 Два помещика』[『獵人日記』] のフヴァルィンスキー將軍 генерал Хвальинский は選挙で「かなり重要な役割を演じるのだが、吝嗇なために名誉ある称号を断ろうとするのである (играет) роль довольно значительную, но от почетного звания, по скупости, отказывается」。

しかしながら、他の地主たちは貴族団長の地位に就くことを熱望していた。ゴーゴリの『幌馬車 Коляски』の主人公チェルトクツキー Чертокуцкий はそういう人物の一人である。「前回の選挙で、彼は貴族たちのために立派な晩餐会を催し、その席で、彼を貴族団長に選んでくれさえすれば、貴族たちに最高の暮らしを約束すると宣言したのだった В прошлые выборы дал он дворянству прекрасный обед, на котором объявил, что если только его выберут предводителем, то он поставит дворян на самую лучшую ногу」。

トゥルゲーネフの戯曲『貴族団長家の朝食 Завтрак у предводителя』には、郡の貴族団長バラガラエフ Балагалаев という、柔和で優柔不断な人物が描かれている。彼は空しくも2人の貴族を——相続した財産の分割に関して言い争っている兄と妹を——和解させようと努力している。彼は言っている——「……私は、彼らの調停者になることに賛同いたしました。なぜなら、これは、ご存知のように、私の義務なのですから…… …я согласился быть между ними посредником, потому что это, вы понимаете, мой долг...」。

レフ・トルストイ『舞踏会の後で После бала』という短編の冒頭は、「客好きな金持ち侍従である県貴族団長の温厚な老人の舞踏会で на бале у губернского предводителя, добродушного старичка, богача-хлебосола и камергера」始まっている。

トゥルゲーネフの短編の1つで¹ 貴族アループキン Алупкин は貴族団長に卑屈な調子で「あなたは、言わば、私たちの第二の父親なのです Вы, так сказать, наш второй отец」と言っている。

¹ 「短編のひとつ」とテキストにはあるが、これは間違い。アループキンがこのセリフを口にするのは『貴族団長家の朝食』第4場 явление IVである。

貴族団長には貴族階級の見せ掛けの品位に気配りする義務があった。そうした存在としての貴族団長の姿は、チャーホフの中篇『我が人生 Моя жизнь』において言及されている。そこでは貴族団長が、平凡な勤労生活の道を踏み出した貴族ポロズネフ Полознев に何が何でも「そうした生活態度を改め изменить свое поведение」させようとして、県知事に協力を仰ぐのである。

〈貴族選挙 дворянские выборы〉は、郡や県の地主貴族のぱっとしたところのない生活においては一大事件であり、彼らの興奮と議論の的となっていた。『冬。村では何をすることがあろう？ 私は迎える…… Зима. Что делать нам в деревне? Я встречаю...』という詩作品でプーシキンは、客間での談話のテーマの一つに「間近に迫った選挙についての会話 разговор о близких выборах」を挙げている。

県貴族団長 губернский предводитель の選挙は、レフ・トルストイの短篇『二人の軽騎兵 Два гусара』の中でも描写されているが、それが特に詳しく、そして色彩豊かに描かれているのは『アンナ・カレーニナ Анна Каренина』の第6部 [25~31章] においてである。

郡貴族団長 уездный преводитель の風刺的な人間像については、レールモントフが物語詩『タンボフ県出納長官の妻 Тамбовская казначейша』の中に描いている――

ほら、郡の貴族団長だ
全身をネクタイに隠して、かかとまである燕尾服を着込み
声はかん高く、口髭を生やして、濁った目をしている。
А вот уездный предводитель,
Весь спрятан в галстукe, фрак до пят,
Дискант, усы и мутный взгляд.

『アンナ・カレーニナ』のスヴィヤシスキー-Свияжский は「模範的な貴族団長で、道中にあつてはいつでも記章と赤い縁取りをした丸帽を身につけていた был образцовым дворянским предводителем и в дорогу всегда надевал с кокардой и с красным околышем фуражку」 [3部26章]。ここにもまた露骨な

皮肉がある。トルストイは、自己権力を示す外面的付属物に対する選良貴族たちのこだわりを強調しようとしているのである。

11 節

農民改革

Крестьянская реформа

ロシア古典文学に登場するのは、ほとんどの場合〈地主所有農民 помещичьи крестьяне〉であり、彼らについてはこれまで散々論じてきた。しかし違ったカテゴリーに属す農民も存在していたのであり、そうした農民については古典作家の作品では時折ざっと触れられる程度である。農民というものの正体を十全に把握するには、そうした農民についても知っておく必要があるだろう。

〈国有地農民 Государственные или казенные крестьяне〉は個人的には自由な農民だとみなされていて、国有地で暮らし、国の利益に資する義務を負っていた。彼らを指導していたのは、政府によって指名された特別な管理者 управляющий たちであった。

〈天領農民 Удельные крестьяне〉は皇帝一族直轄の農民で、年貢を支払い、公務を負っていた。

〈経済農民 Экономические крестьяне〉は1764年までは修道院と教会に属していた。その後、修道院や教会の土地は経済参議会へと委譲され、国有化されてしまったために、経済農民は相対的に自由な身分のまま、国家に対する義務を負うことになった。後に経済農民は国有地農民と合体することになった。

〈私企業に徴用された国有地農民 Посессионные крестьяне〉は私企業に属し、工場労働者として使われた。

1861年の農奴制の廃止は、程度の差こそあれ何らかの形で、すべてのカテゴリーの農民に影響を与えた。しかしここでは、農奴制の廃止が諸カテゴリー中最大であり（2300万）、ロシア古典文学に詳細に描かれている地主所有農民〔いわゆる農奴〕にどのような影響を及ぼしたかについてだけ論述することに

しよう。

1861年2月19日の農奴制の廃止は概して、大地主の利益を第一に考慮したものであった。農民は個人的にはより自由になり、農民の売買は禁じられたものの、農民は自分の分与地 *надел* を地主から買いとらなければならなかった。その際農民が受領したのは、自分が耕した分与地ではなく、地主の有利なように強制的に分割された土地であり、しかもその価格たるや正価を大幅に上回るものであった。分与地の譲渡に際し、地主は農民にもっとも貧弱で痩せた土地を割当てたのであった。

〈農地買戻し約定証書 *Уставные грамоты*〉の作成のために、つまり1861年の改革後の地主と農民との関係を調整する書類を作成するために、それぞれの現地の貴族の中から〈農地仲裁官 *мировые посредники*〉が任命された。農民の運命の多くが、これらの仲裁官の個人的性質に、すなわちその仲裁官が公平か否か、親切か否かということにかかっていた。仲裁官の中には、公平な裁断を下そうとするリベラルな人々も見受けられた。そうしたりベラルな仲裁官として挙げられるのは、レフ・トルストイの『アンナ・カレーニナ』のコンスタンチン・レーヴィン *Константи Левин*、ドストエフスキーの『未成年 *Подросток*』のヴェルシーロフ *Версиков* であり、恐らくトゥルゲーネフの『父と子』の温厚なニコライ・ペトロヴィチ・キルサーノフ *Николай Петрович Кирсанов* もまたそうした性質の持主であったに違いない。

地主の利益のために、農民は分与された農地の価格の20～25%を一括で支払わなければならなかった。残りは始めのうちは国庫から支払われたが、それは農民が期限49年の貸付金を、毎年貸付金の6%ずつ分割払いで返済するようにするためであった。

分与地代金の20～25%を地主に一括納入できなかった農民は、〈一時的義務負担農民 *временнообязанные*〉と見なされ、以前の所有者のために、その頃は賦役 *барщина* あるいは年貢 *оброк* と呼ばれるようになっていた〈物納 *издольщина*〉に従事し続けた。一時的義務負担農民として描かれているのは、ネクラソフの物語詩『誰にルーシは住みよいか』の主人公である7人の

百姓である。1883年に一時的義務負担農民というカテゴリーは廃止された。この年までに、農民は地主に買戻し金を全額支払うか、または分与地を剝奪されるかのどちらかを選択しなければならなかったのである。

改革直後には一農民世帯平均3.3デシャチーナ десятина [1デシャチーナ=1.09ha]の土地が分与された。つまり3.5ヘクタールの土地が分与されたが、それは一家がどうかこうにか生きていける面積であった。場所によっては農民に提供されたのは0.9デシャチーナという、きわめて微々たる分与地でしかなかった。

ロシア文学の世界では1861年の農民改革とその結果は地主と農民の双方に甚大な影響を及ぼしている。オストロフスキーの戯曲『無知な女 Дикарка』において、2人の地主アシメチエフ Ашметьев とアンナ・ステパーノヴナ Анна Степанова の間で交わされる改革に関する対話は、この意味で示唆に富んでいる。アシメチエフが「まあどうやら、わしらはあまり不平を言っちゃいけないみたいだね。私たちはそんなにたくさん失ったわけではないのだから Ну, нам, кажется, очень жаловаться нельзя, мы не очень много потеряли」と言うのに対し、アンナ・ステパーノヴナは「まったくこれはめったにないことだわ。これは特別な幸福よ……キリール・マクシムィチがその時仲裁官で、私たちのために農民たちとの農地買戻し約定証書を作成してくれたの。彼ったら農民たちを散々やりこめてくれたから、農民たちには鶏1羽追込む場所すらないの。彼のお陰で、万々才よ。私のところじゃ、農民たちが農奴とまったく同じに、同じ分だけ働いてくれるわ。—今も昔も何の違いもないわ Так ведь это исключение, это особое счастье... Кирилл Максимыч был тогда мировым посредником и составил нам уставные грамоты с крестьянами. Он так их обрезал, что им курицу выгнать некуда. Благодаря ему я хорошо устроилась: у меня крестьяне так же и столько же работают, как и крепостные — никакой разницы」と言うのである。

ゴーリキーГорькийの長編小説『母 Мать』の農民エフイーム Ефимは「お前たちは、自分の分与地を持っているか? Вы сами — имеете надел?」と

聞かれたとき、「俺たちが？ 持っているともさ！ 俺たちは3人兄弟なのだが、分与地は4デシャチーナときている。砂ばかりで銅を磨くには良いが、穀物を作るにはからっきしダメな土地さ！…… Мы? Имеем! Трое нас братьев, а надела — четыре десятины. Песочек — медь им чистить хорошо, а для хлеба — неспособная земля!..」と答え、さらに「俺は土地からスッパリ足を洗ったのさ。— 土地が何だっていうのだい？ 耕作したって全然喰っていけないし、ただ手が疲れるだけさ。作男になって4年目だよ Я от земли освободился, — что она? Кормить не кормит, а руки вяжет. Четвертый год в батраки хожу」と続けている [1部25章]。

何百人という農民は零落し、以前の地主かあるいは富農のもとへ作男として働きにいたり、町に出て改革後の数年に急速に数を増していったプロレタリアートの一員となったりしたのである。

とくに過酷だったのは、屋敷番農民の運命である。彼らには農地分与がなく、ために地主にも彼らに土地を提供する義務がなかったからである。屋敷番農民の一部は、チェーホフの『桜の園 Вишневый сад』のフィルス Фирсのように、貧窮した地主の下で死ぬまで仕え続けた。彼らの大部分は土地も金も持たぬままに四散させられた。地主が自分の領地を捨て去ろうとした場合には、彼らは地主屋敷にとどまって飢えることになったが、地主にはどんな現物支給も俸給も彼らに支払う義務はなかった。このような不運な農民たちのことを、ネクラソフは物語詩『誰にルーシは住みよいか』で書いている —

……その地主屋敷内をうろついていたのは

腹を空かした屋敷番農民、

地主に見殺しにされた

屋敷番の農民。

どいつもこいつも年寄りで病弱、

しかもジブシーの群れの中にいるような

ひどい身なりをしている。

〔「百姓女」／「プロローグ」〕

...В усадьбе той слонялися
Голодные дворовые,
Покинутые баринном
На произвол судьбы.
Все старые, все хворые
И, как в цыганском таборе,
Одеты.

改革後の屋敷番農民の悲運を、サルトゥイコフ＝シチェドリンは短編『裁縫師グリーシュカ Портной Гришка』の中で鮮明に描いている。

改革直前、多くの地主は改革のことを耳にすると、禁止されているのにも関わらず、自家農民のほとんど全員を屋敷番農民に転換しようとした。農民から農地分与権を剝奪するのが目的であった。

ネクラソフは書いている —

「巨大な鎖はちぎれた、
ちぎれて飛び散った。
一方の端は、地主目掛けて、
もう一方の端は百姓目掛けて！」
[1部5章「地主」]¹

«Порвалась цепь великая,
Порвалась — расскочилась:
Одним концом по барину,
Другим по мужику!»

確かに、地主もまたひどい目にあっている。特に貧しい地主の被害は大きかった。彼らには買戻しの際に受け取ったお金をすぐに使い果たしてしまう

¹ ちなみにネクラソフ『誰にロシアは住みよいか』の構成は①「1部 Первая часть」②「百姓女 Крестьянка」③「末裔 Последыш」④「大盤振る舞い Пир — на весь мир」の4部からなっている。また4部それぞれの内訳は①「プロローグ」+5章、②「プロローグ」+8章、③3章、④「序」+5章となっている。

と、もはや生計を立てる手段が残されてなかった。〈買戻し証明書 **выкупные свидетельства**〉——すなわち地主に交付された買戻し金受領権利の証書——は、二束三文で売られるか質草にされてしまった。彼らは最終的に相続した土地を手離さざるをえない状況に追い込まれ、そうした土地は瞬く間にやり手の商人や富農の手に落ちることになった。だがそうして手に入れた金も当座のしのぎにしかならなかった。

どの地主よりも早く破産し、消えていったのは領地の小さい地主たちであり、彼らに続いて没落したのは中規模領地の地主たちである。「貴族の巢 **дворянское гнездо**」が破産していく光景、貴族が零落していく光景は、ブーニンやアレクセイ・トルストイ Алексей Толстой の作品の中に鮮明に描かれている。

1905年の第一次ロシア革命に伴う諸々の出来事に影響されて、政府は農民からの買戻し金徴収を1906年に廃止した。つまり実際の有効期限の4年前に廃止したのである。

レフ・トルストイの喜劇『啓蒙の果実 **Плоды просвещения**』では、怒り狂った農民たちが町に住む地主のところに、土地を買うためにやって来る。一人の農民が「土地なしでは、我々の村落は衰弱し、破滅せざるをえない **Без земли наше жительство должно ослабнуть и в упадок произойти**」と説明すると、もう一人の農民が「……土地は小さい。家畜を飼うどころじゃない。たとえば鶏の雛一羽を放し飼いにする場所すらないぐらいだ **...земля малая, не то что скотину, — куренка, скажем, и того выпустить некуда**」とつけくわえる。しかし零落した地主が約束されたはずの分割払はうけつけず、全額一括支払を要求するのに対し、農民たちには金がない。こうして地主連中の迷信深さを利用する小間使ターニャの機転だけが、農民の代表者たちの本懐成就を手助けすることになるのである。

ゴーリキーの長編小説『クリム・サムギンの生涯 **Жизнь Клима Самгина**』では、一人の登場人物が19世紀末の農民の状態を次のように特徴づけている——「百姓の暮らし振りときたら、まるで征服された人々のようであり、捕虜

になった人々のようだ。少し若い連中はといえば、それぞれが思い思いの方向へ去ってってしまうのだ。Живут мужики, как завоеванные, как в плену, ей-богу. Помоложе которые — уходят, кто куда」。

1861年の改革の結果とは以上のようなものであった。